

## 基幹共同研究「常民生活誌に関する総合的研究」 “日常茶飯”—日本人は何を食べてきたか—予備的研究

期間：2020 年～

〔所員〕 佐野賢治 周 星 須崎文代 廣田律子 安室 知 山本志乃

### 日本人は“魚米の民”か？

佐野 賢治

庶民の日常、常民文化の根幹はいつの時代、どの地域においても衣・食・住が基本となる。和食が世界文化遺産に登録されたが、多様な郷土食だけを見ても、和食とは？ の定義付けは難しい。本研究では、日本の常民の食生活、日本人は何を食べてきたのかを多角的に、また異文化から見た和食の特長を検討する。2020 年度は、その予備的研究期間として、学際的にその課題、視角、方法について先行の蓄積を学外の研究者も招き論議、また、東京農業大学「食と農」の博物館、静岡県島田市「ふじのくに茶の都ミュージアム」を訪問し、学術交流を深める計画であった。

日本は四方を海に囲まれ、歴大な数の河川に恵まれ全国約 3,000 カ所の縄文貝塚からは多種類の魚骨、貝殻が出土するなど古くから魚食文化が根付いたが、獣肉食は仏教の影響もあり近代に至るまで遠ざけられてきた。その一方、日本人の主食は米とされながら、実際は「米食民族」ではなく「米食悲願民族」であり、庶民が米を常食できるようになったのは戦後、高度経済成長期以降で、それまでは雑穀や麦、芋、豆を混ぜたカテ飯が当たり前と言われてきた。しかし近年、米を常食化してきた地方もあること、その土地に適応した作物を日常食にしたとの実証的研究も示されてきた。

本研究では、肉食率が魚食率を超え、コメ離れが進み食生活が多様化する中で、従来の通説を再



写真1 「太華茶」を作る（雲南省臨滄市魯史鎮／写真・楊蕊）

検討し、食材のみならず、食事作法、食器など広く食事文化を当たり前の「日常茶飯の文化」の表象としてとらえる。当然、茶に対する酒のように非・日常として食事文化もその対照として取り上げられる。参加メンバーのテーマとして、「米文化の再検討・餅の多様性」、「食をめぐる物質文化・民具」、「食の比較文化——粽など」、「日常・非日常の食文化」、「グローバル時代と食文化」などの報告が今後、予定されている。

2020年度は、プロジェクト開始にあたりその目的、方向性を具体化する期間としたがコロナ禍の中で予定した研究会・現地共同調査・博物館訪問のいずれも実施が見送られた。本プロジェクトは常民の日常生活の原点、衣・食・住に焦点を当てる基幹共同研究の下、食文化を「日常茶飯

——日本人は何を食べてきたか」のテーマで誰でもが関心を持ち、参加できることを目指す。先行の蓄積をその課題、視角、方法についてまず学ぶため、斯界で活躍する学外の研究者に声をかけ応諾を頂き、また、東京農薬大学「食と農」の博物館、静岡県島田市「ふじのくに茶の都ミュージアム」の訪問、交流計画も予定したが中止のやむなきに至った。

コロナ禍は年度末になっても終息を見せず、佐野の退職に伴い新たな世話役、周星のもとに次年度からの仕切り直し、まずは所員による発表として、安室所長の長年の研究、餅文化の報告から始めることとした。加えて、韓国茶学会主催の済州島での「日常の茶」シンポジウム（2021年11月開催）など海外の関係する活動への参加など、東アジア地域を今後、調査研究上の視野に含むことも提議された。



写真2 茶を摘む滇西系彝族女性



写真3 飯山市富倉のササズシ（安室知氏／撮影）



写真4 有園正一郎『近世庶民の日常食——百姓は米を食べられなかったか——』海青社(2007)